

[実践報告]

Bangladeshにおける体育教育事情について*

北原 三代志¹⁾
(平成20年 3月10日 受理)

The circumstance of physical education in Bangladesh.

Miyoshi KITAHARA (Suzaka Engei High School)

キーワード: Bangladesh, 体育教育, ゴールデンエイジ

1. はじめに

筆者は2003年7月～2005年3月の約18ヶ月間、文部科学省の現職教員特別参加制度により青年海外協力隊員としてBangladesh人民共和国の体育教育に携わった。筆者が派遣された目的は、現地の教員や学生の指導力と資質の向上、および学校対抗の体育大会の開催に協力するということであつた。ここでは筆者が勤務したラッシャヒ体育大学の様子を中心に、Bangladeshにおける体育教育や諸事情について報告する。

2. Bangladeshの体育教員養成

Bangladeshの総合大学には日本のような体育教員養成課程(教育学部)は設置されていない。そのため、体育教員の免許を取得するには体育大学で学ばなければならない。国立体育大学は4校あり、ダッカ、バゲルハット、チッタゴンそしてラッシャヒという都市に各1校合計4校ある。私立体育大学は合計8校が設置されている。しかし、大学といっても単年度の学校である。カリキュラムは、陸上競技・バレーボール・器械体操などにクリケット・カバディなどを加え14種目の実技と、生理学・解剖学など12の座学を10ヶ月間(7月～翌年4月末)で学び単位を修得することになっている。学生の定員は200名(男子160名、女子40名)であり、その約8割が数学や英語といった他教科の現職教員で、内地留学生として学んでい

る。学生の平均年齢は男性が30歳、女性が25歳前後で、半数以上は既婚者である。全寮制のため長い期間、家族と離れて暮らさなければならず、家族を大切にす Bengali人にとっては大変辛いことのようなのだが、体育教員免許を取得し現場に戻ると給料が月に約千円アップするので、家族のために頑張っている面も窺える。

3. 勤務したラッシャヒ体育大学の教育事情

ラッシャヒは首都ダッカから西に約260Km、Bangladeshとインドの国境に位置し、国内で4番目に人口の多い都市で、大学や短大も多く学園都市とも言われている。Bangladeshは毎年洪水の被害があるが、この都市は被害も少なく住みやすい所であつた。

ラッシャヒ大学の教員は校長の他、男性教員が5名、女性教員が3名(図1)のみであり、それぞれ大学内での仕事だけでなく、IAAF(国際陸上競技連盟)やFIBA(国際バスケットボール連盟)のルールブックをBengali語に翻訳して、授業での活用や国内のフェデレーション(競技団体)に提供する仕事も担当していた。また、ほとんどの教員がインドなどに留学して修士課程を修了している。

大学の実情を下記に示す。

(1) 入学試験

入学のための実技試験は、7月から始まる授業

* 2008年1月26日 日本体育学会長野支部学会第43回大会にて口頭発表

¹⁾ 長野県須坂園芸高等学校

のために6月中旬に行われる。実技種目は100m疾走(男女共通)と男性は水泳とサッカーが行われる。試験であるにもかかわらず、女性はスポーツウェアではなく普段着でしかも裸足(図2)であり、スポーツに対する先進諸国との意識の差が窺える。日常生活では男女ともサンダルで、男性は革靴も履くが、スポーツとなるとまだ裸足の方が感覚的にしっくりとくるのかもしれない。

(2) 日課について

学生の日課を表1に示す。バングラデシュではイスラム教徒が約9割を占め、モスクで礼拝を行うため金曜日が休日となる。木曜日午後も休日で土日は授業がある。ほとんどの先進諸国は土日が休日のため、バングラデシュは4日間世界の経済活動に参加できず、このことが経済発展しない理由のひとつに挙げられている。

早朝の朝礼(図3)は、点呼、国旗掲揚、国歌斉唱、校長訓辞と続き、ウォーミングアップとストレッチを行った後、実技Ⅰの授業となる。

年間を通しての特徴は、11月あたりに約1ヶ月間断食月(ラマダン)である。この期間は日の出から日没までは、飲食物はもちろんのこと、唾も飲み込んではいけないという。運動をすれば当然喉が渇くが水は飲んではいけない、という理由で学校は休講になる。

(3) 実技の授業

筆者が主に関わったのが学生への実技指導である(図4)。言語はすべてベンガル語で行った。実技の授業は気温が上がる日中を避けた朝6時半と夕方4時からそれぞれ2時間行われた。

バングラデシュでは学校教育のなかに「体育」という教科はないので、この学生たちも遊びとして経験したサッカーやクリケットを除けば、スポーツの経験はほとんどない。したがって、たった10ヶ月という短い時間で多くのスポーツの実技とルール、指導法を学ぶというのは至難の業である。

体育大学で行われていた実技種目は表2のとおりである。筆者は陸上競技、器械体操、バレーボール、バスケットボールを担当した。イギリスの植民地だったバングラデシュではクリケットが一番人気のあるスポーツで、休日には空き地でクリケットをして遊ぶ子どもたちをよく見かけた。そ



図1 教員集団(左から4番目が校長)



図2 実技試験 裸足で走る100m走

表1 学生の日課

項目	時間
点呼・朝礼	6:30 ~
実技Ⅰ	6:45 ~ 8:30
朝食	
講義Ⅰ	10:00 ~ 11:00
講義Ⅱ	11:10 ~ 12:10
昼食	
(暑さのため休憩)	
実技Ⅱ	16:00 ~ 18:00
自主練習	18:00 ~ 19:00



図3 国旗掲揚と国歌斉唱から始まる朝礼

表2 大学で実施される実技種目

<ul style="list-style-type: none"> ・球技 バレーボール, バスケットボール, ハンドボール サッカー, ホッケー, バドミントン, ホッケー クリケット, 卓球 ・器械体操 男子: 鉄棒, 平行棒, マット運動, 跳び箱 女子: 平均台, マット運動, 跳び箱 ・陸上競技 100m, リレー, 走高跳, 走幅跳, 三段跳 砲丸投, 円盤投, やり投 ・水泳, 集団行動 (図5), カバディ (図7), ココ

の他, 国技であるカバディやインドで盛んなココなどはバングラデシュならではの種目と言える。

また, 通常授業の他, 「レフリーコース」と称しサッカーとハンドボールの審判員資格が取得できる特別授業が開講されている (図8)。各フェデレーションから講師を招き, 約1週間の日程でルールや審判法を学び, 最終日に試験を受けて審判資格を取得する。合格すると大きな自信に繋がる。



図4 筆者が指導した学生たち



図7 バングラデシュの国技「カバディ」



図5 早朝の集団行動



図8 ハンドボールのレフリーコース



図6 池で行われる水泳の授業



図9 軟弱なグラウンドでのハンドボール

(4) 施設・用具について

体育館は床がコンクリート製で、大きさは長野県内高等学校の小体育館（縦35m×横25m）程である。ここは器械体操、バドミントンや雨天時に使用したが、照明が暗く夜間の使用は難しい。

グラウンドは400mトラックを取れるほどの大きさがあり、陸上競技やサッカーの他、バレーボールやハンドボールも屋外で行っている。

バスケットボール用のコートも屋外にあり、サーフェスはコンクリートである。

水泳（図6）は学校内の池で行われたが、風呂に入る代わりに普段池や川で水浴びをしている学生にとって、特別抵抗はないようであった。

6月から10月は雨季で、ほぼ毎日激しいスコールがある。さすがに雨が降っている中では実技は行わないが、雨が止むと多少グラウンドがぬかっけても練習を行っていた（図9）。

用具に関しては十分とはいえないが、授業で使用する最低限の数量は揃っていた。ボール類はイ

ンドやパキスタン製で、湿度が高いため水分を吸収するのが重く感じた。ラケットやシューズなどの用具も高い品質を求めなければ、近隣のスポーツ店で準備できる。

(5) 講義

講義は、朝の実技、朝食の後、午前10時から12時10分まで10分の休憩を挟んで1時間ずつ2コマ行われる。講義科目は表3に示したとおりである。解剖学など専門的な科目については、病院のドクターが非常勤講師として担当している。

教室は講堂で、200人が一斉に受講する。講堂の天井にはたくさんのファンが付いていて、なんとか暑さはしのげるが、停電が多いためファンが止まると、室温が35℃くらいまで上昇し厳しい環境となる。しかし、学生は白を基調とした非常に爽やかな制服を着て授業を受けている（図12）。貧しい国ではあるが、授業や外出時の服装および頭髪などはきちんとしており、日本の学生も見習うべき点が多々あると感じた。

(6) クラスマッチ

学校が始まって2ヶ月、授業にも慣れてきた頃にチーム（ハウス）を作る。男子は160名を20名毎8チーム、女子は40名を10名毎4チームに分け、それぞれのチームに担当の教員がつく。これは集



図10 コンクリート製バスケットボールコート



図11 Tシャツ姿の女子学生（Tシャツは校内のみ）

表3 講義科目

・健康教育と応急処置	・体育指導法
・体育史	・スポーツ心理学
・解剖学	・スポーツ生理学
・体育協会と運営	・体育教育の理論と原理
・スポーツルール	・その他



図12 男女別の席で講義を受ける学生

団行動やクラスマッチの練習を行うためである。また、実技の授業も少人数でローテーションをした方が効率の良いときもある。

クラスマッチ（図13、14）は年に3回開催される。種目と開催月はハンドボールが9月、サッカーは10月そしてバレーボールは2月である。日常生活に娯楽のない学生にとって、この行事は大きな楽しみであると同時に、実際に試合ができ、授業や自主練習の成果を確かめる機会ともなる。勝ち負けにこだわり、優勝すると大騒ぎになり、「サー（先生）、今日は僕たちに何かご馳走してくれ」と、要望してくる。イスラム教のこの国では飲酒が禁止なので、20人全員に夕食をご馳走しても2千円程度の出費である。

（7）教員と学生の関係

この国では宗教上の位（特にヒンドゥー教徒の中にはカースト制も残っている）、社会的地位、年齢などから上下関係がはっきりしている。下の位の者が上の者に対してものを言うということはま



図 13 開会式での整然とした入場行進



図 14 筆者の担当チームが優勝

ずない。イギリス植民地時代のなごりからか先生は「サー」と呼ばれる。先生の言ったことに対し、学生は従わなければならない。返事は「イエス・サー」である。学生たちは言うことに素直に従うので、最初は楽で良いと思ったが、その後はそう呼ばれるからには、学生に対して立派だと思われる授業や振る舞いをしなければいけないと自分を戒めたものだった。

（8）学生を指導する上での留意点

①フェアプレーの精神を持つこと

ハンドボールで「中東の笛」が話題になったが、この国でもフェアプレーの精神より勝つことがしばしば優先される。地元で有利なジャッジや年齢を偽って試合に参加するなど明らかにアンフェアなことを平気で行う学生もいる。言い聞かせるとそのときは「わかりました」と返事をするが…

②練習（努力）することの大切さ

暖かな国に共通する国民性なのか、一般の人でもその日を食べていけるだけのお金を稼ぐとそこで仕事を終わりにする。もっと努力しようとかもっと上手くなろうという気持ちはあまりないのが残念だった。自主練習の時間に、努力してできるようになった学生をよく大きな声で褒めてやった。そうするとまた嬉しくなって練習する。もしかしたら学生の生活や人生の中には動機とか夢というものが希薄なのかもしれない。

③褒めること、悪いことはその場で注意する

一人を褒めると小学生のように「俺のも見てくれ」と寄ってくる。このような単純で明るい性格は筆者の一番好きなどころだ。しかし少し目を離すと回数のごまかし、さぼり、あるいはテスト時のカンニングもあり根気よくその場で注意した。

④どの人（貧富・宗教等）にも区別なく接する

バングラデシュには目には見えない社会的、宗教的階級があるため、上の者に対する嫉妬心も強い。学校内だけではなく、近所や町中でも日本人がいることはすぐ知れ渡る。「彼はどういう人間か」と、どこでも話題になり、「彼は誰でも区別なく接し、正直で良い人間だ」と噂されればそれだけで生活は安泰になる。また、困っていれば誰かが助けてくれるし、自分のいうことも聞いてくれる。

(9) 卒業試験

卒業前の2月～3月には実技試験,筆記試験(図15),および口頭諮問が行われる。実技試験はA～Eの評価を付け,筆記試験は点数で評価する。1000点満点で配点は実技試験が600点,筆記試験が400点であることの説明を受けたが,詳細は不明であ



図15 校内で行われた筆記試験(2月)



図15 卒業式 ディプロマを受け取る学生



図16 送別会:もう一つの制服「サリー」姿の女子学生

る。試験問題については資料として付け加えた。

(10) 卒業式

4月30日に卒業式が行われた。ダッカからディレクター^{注1)}が来校し,学生一人ひとりにディプロマを渡す。長期間,寮生活をしてきた学生には自宅に戻れる安堵の表情と,仲間と離れる寂しさが入り交じっていた。残念ながら不認定となった学生(1割弱)は,来年の同時期に再度試験を受けなくてはならない。

4. 教員の給与と待遇

開発途上国が発展できない一つの原因として,教育問題がある。中でも,子どもたちが学校に行けない程の経済状態や,教員自体の質が低いといった問題があげられる。教員の質は給与や待遇に大きく左右される。バングラデシュの義務教育教員の平均給与は月額約6,000円。体育大学の教員は8,000円,校長でも10,000円程度であり,国全体の一人あたりの平均月收入が4,000円とされているので,高額とは言えない。しかし,安定性や社会的により上位な地位を求めて公務員になりたがる傾向が強い。

バングラデシュでは小学校から進級試験があり,パスしないと進級できないが,家庭の経済状況が大きく関与することも報じられていた。

当時ニューヨークタイムズ紙では,世界のNo.1ランキング:政治の汚職・腐敗部門でバングラデシュが3年連続のトップであった。つまり世界で一番国民のために政府(公務員)が機能していないということが言える。海外からの援助金も使途が明確にならない体質は,いつになったら改善されるのだろうか。

5. 体育が授業に取り入れられない理由

体育教員を養成する理由について,チアマン^{注2)}の発言によれば「将来,体育を先進国並みに授業に取り入れていくため」と言うことである。しかし,いつ実現するのかは明らかにされていない。バングラデシュに限らず,近隣の開発途上国において体育をカリキュラムに取り入れている国は少ない。バングラデシュでは次のような理由が考察される。

(1) 主要教科偏重の風潮

バングラデシュでは英語・数学・国語等主要教科等学校教育は「教育省」、体育教育をはじめ各競技団体の活動やナショナルチームの育成など、スポーツに関わる分野を「青年スポーツ省」が担当している。体育をやる時間があるのなら読み書きそろばんをしっかりやりなさい、これが教育省の考え方である。体育は「遊び」として捉え、授業には必要ないとする教育省と、体育をぜひ取り入りたいと願う青年スポーツ省との歩み寄りが難しい。

(2) 厳しい暑さ

4月～10月は日中の気温が35～38℃まで上がるため、通常の授業時間帯(9:00～15:30)では、体力のある大人でさえ屋外で体を動かすのは大変である。日課でもわかるように昼食から16:00までは休憩で、町の商店も閉り人通りも少なくなる。

(3) 宗教上の風習

特に女子においては、10歳を過ぎた頃から男子のように、外で元気に遊びまわることについては品がないとされ、活動的な服装や外出も制限される。イスラム教では貞操観念が非常に強く、結婚前の男女交際も許されていない。オリンピックなどでイスラム圏の女子選手が、できるだけ体を隠した服装で競技をしている姿は良く目にする。

(4) 教育予算および施設・用器具の不足

体育大学においては、ボールやグラウンドなどは最低限揃っているが、一般の小学校から大学では日本とは比較にならないほど不十分である。また、村の学校ではノートや鉛筆も不足しており、全体的に教育予算が少ないことがあげられる。

6. まとめ

指導要領に示された「総合的な学習」では、「国際協力」「異文化理解」という内容が取り上げられるようになって久しい。敗戦後、貧しかった日本が欧米諸国からの援助を受けながら経済復興を遂げ、現在ではアメリカに次いでODA(政府開発援助)世界第2位という援助国となるまでに成長した。まさにリーダーとして世界を理解してい

なければならない立場である。

1965年発足以降、開発途上国援助を担ってきたJICA(国際協力機構)の活動は当初、農業、道路や橋の建設、飲料水の確保といったインフラ整備がその中心であった。しかし、近年では理数科、音楽そして体育といったその国の教育の質の向上に援助の重点が移されている。物やお金ではなく教育こそがその国を育てていけるという視点からである。このような背景から体育に関してもこれから充実させていこうとする気配がある。

今回の体験をとおして特に感じたことは、ゴールデンエイジにおける様々な運動体験の必要性である。どこの国でも子供たちは体を動かすことは大好きである。日暮れが近づく頃、空き地に集まった子供たちはサッカーやクリケットに興じる。しかし、今回指導した学生で、特にゴールデンエイジにスポーツの経験のない学生の実技は未熟で、器械体操の前転、バスケットボールのドリブルといった簡単な動作がうまくできない。また、示範を模倣し行動に移すことが難しい。学生は必死で頑張るが、体が思うように動かない。指導者側も見ていても歯がゆくなる場面が多い。このような姿を見て、幼少からの各発達段階で必要とされる運動を、タイミングよく行うことがいかに大切かという事を痛感した。ゴールデンエイジにおける神経系のトレーニングはまさに一生の宝物といえる。

さまざまな環境が整わず、体育ができないバングラデシュと、豊かになりすぎて身体を動かさそうとしない日本とのギャップを再認識させられた。

2005年3月3日、半日の授業をつぶして私のために学校をあげて送別会を開いてくれた。慣れない土地で生活そのものや仕事があまく進まず悩んだこともあったが、多くのプレゼントや別れを惜しむ言葉を聞くと、本当にこの国に来てよかったと感じた。また機会があれば、微力ながらこの国の教育に関わりたいと思っている。

注1) ディレクター：スポーツ省の大学担当責任者
(各大学校長より格上)

注2) チアマン：スポーツ省大学担当最高責任者

日本体育学会長野支部会平成 19 年度総会議事録

日 時 平成 20 年 1 月 26 日 (土) 午後 1 時～午後 1 時 40 分

場 所 信州大学教育学部 E504 教室

<報告・了承事項>

1. 日本体育学会代議員会等報告

2. 平成 19 年度事業報告

① 長野支部学会第 43 回大会について

岩田理事長より、第 43 回大会は 12 題もの多数の演題が集まり盛大に開催できることが報告された。また、会期を 12 月ではなく、1 月に調整したことが報告された。

② 「長野体育学研究」第 15 号の編集状況について

結城編集担当理事より、原著論文 1 件、実践研究 1 件の応募があり、編集を進めていることが報告された。また、実践現場や若手研究者が投稿しやすい「実践報告」「ショートペーパー」などの投稿カテゴリーの新設が提案され、了承された。

3. 平成 17・18・19 年度決算報告

平野総務担当理事より、平成 17・18・19 年度の決算報告があった。

<協議事項>

1. 平成 20 年度事業案について

① 長野支部学会第 44 回大会および総会

岩田理事長より、長野支部学会第 44 回大会および総会について資料 1 のように計画されていることが提案され、承認された。

② 「長野体育学研究」第 16 号の発行

岩田理事長より、「長野体育学研究」第 16 号の発行について資料 1 のように計画されていることが提案され、承認された。

③ その他の事業

岩田理事長より、その他の事業について資料 1 のように、シンポジウムの開催が計画されていることが提案され、承認された。

2. 平成 20 年予算案について

平野総務担当理事より、平成 20 年度の予算案が提示され、承認された。

3. 甲信支部統合に向けての準備について

平成 20 年 3 月を目処に、糟谷長野支部会長、岩田理事長ほか 1～2 名の理事が山梨支部に出向き話し合いをもつことが提案され、了承された。

4. 平成 21・22 年度の理事選挙について

岩田理事長より、平成 21・22 年度の理事選挙には、選挙管理委員会を置き、これを総務担当理事とすることが提案され、承認された。

【資料1】

日本体育学会長野支部会 平成20年度事業(案)

1. 長野支部学会第44回大会・総会

開催日：平成21年1月31日(土) 開催予定

場 所：信州大学教育学部

○大会開催案内	平成20年9月上旬
発表受付・大会抄録締切	平成20年11月下旬
大会号発送	平成20年12月下旬

2. 「長野体育学研究」第16号の発刊

発行日：平成21年3月末予定

○投稿案内	平成20年7月下旬
投稿申込締切	平成20年10月末日
投稿原稿提出締切	平成20年11月末日

3. シンポジウム

「学習指導要領の改訂と期待される体育授業像」(仮題) 期日：平成20年前半

○本年度末までに新学習指導要領が告示される見通しである。そこには、これまでの体育授業の姿を見直し、改善していかなければならない事柄も多いであろう。

そこで、文部科学省教科調査官にご講演(講義)をお願いし、その内容をもとにディスカッションできるプログラムを提供したい。

○平成23年に全国学校体育研究大会が長野市で開催される(主催は文部科学省)。そこでは地元からの多くの授業提案がなされることになっている。そのための組織立ち上げが平成20年の春期に準備されているが、長野県教育委員会・長野市体育学習指導研究会等と連携しながら企画をしたい。

○そのような企画を契機にしながら、支部会員の拡大をも意図したい。

日本体育学会長野支部学会研究論文集に関する規定

- 第一条 日本体育学会長野支部会（以下本会という）は、会則第14条第3項の定めにより、研究論文集「長野体育学研究(Nagano Journal of Physical Education and Sports)」(以下論文集という)を発刊する。
- 第二条 論文集発行の期日は、当分の間特にこれを定めない。
- 第三条 論文集の編集は編集委員会によって行う。
- 第四条 論文集の発刊停止又は廃刊は、本会の総会において決定する。
- 第五条 附則 本規定は昭和58年12月4日より施行する。
附則 本規定は平成6年12月11日に改正し、同日より施行する。

「長野体育学研究」投稿規定

(平成 7年12月 3日 改正)
(平成 14年12月14日 改正)
(平成 20年 1月26日 改正)

1. 投稿は日本体育学会長野支部会の会員に限る。ただし編集委員会が依頼する場合はこの限りではない。
2. 投稿内容は体育学の研究領域における総論、原著論文、実践研究、ショートペーパー、実践報告、研究資料などとし、完結したものに限る。これらは、編集委員会が依頼した査読者による審査を経て、編集委員会がその採否および掲載時期を決定する。審査の結果、原稿の部分的な書き直しを求めることがある。
3. 本誌に掲載された原稿は、原則として返却しない。
4. 原稿は、原則としてワードプロセッサによるカメラレディ原稿とする（執筆要項は別に定める）。ただし、紀要編集委員会が認めた場合はこの限りではない。論文は刷り上がりを極力偶数ページとする。但し、手書き原稿で提出し、別に定める料金を著者が負担することにより、ワープロ入力を編集委員会に依頼することができる。
5. 原稿の作成にあたっては、以下の事項を厳守する。詳細は執筆要項による。
 - (1) 原稿は、A4判無地用紙を用い、横書きで入力する。
 - (2) 欧文原稿及び欧文アブストラクトについては、「別紙」としてその和訳文を添付する。
 - (3) 原稿の体裁は、最初から順に論文題目・必要な場合は副題目・著者名(所属)・欧文題目・必要な場合は欧文副題目・著者のローマ字名<名は頭文字のみ大文字, 姓はすべて大文字>(所属)を表記する。これらに続いて、欧文のアブストラクト(250語以内~なくても可)・本文・注・文献の順に記述する。
 - (4) 写真を使用する場合は、鮮明なものを傷がつかないように提出する。ネガを添えることが望ましい。挿入箇所を本文中に明記する。
 - (5) 度量衡単位は、原則としてSI単位(m, kg, cm, kg, mgなど)を使用する。
 - (6) 飾り文字・特殊記号などの使用はなるべく避ける。ゴシック太字等は用いない。

- (7) 本文中の欧文及び数値は、1文字の場合は全角、2文字以上続く場合は半角文字で書く。
- (8) 本文中での文献の記載は、著者・出版年方式(author-data method)とする。また、文献リストは、本文の最後に著者名のABC順に一括し、定期刊行物の場合には、著者名(発行年):論文名、誌名、巻号:引用ページ(p.またはpp.)の順とし、単行本の場合は、著者名(発行年):書名、発行所、発行地:引用ページ(p.またはpp.)の順とする。詳細は執筆要項参照のこと。
- (9) 注書きは、本文の末尾と文献の間に、注1)、注2)のように番号順に記載する。
6. 提出する原稿は、オリジナル原稿1部とその論文のみが入力されている3.5インチのフロッピーディスクまたはCDとする。なお、ディスクのラベルに、論文タイトル、著者名、使用機種・ソフト名(バージョン)を記入する。
7. 総説、原著論文、研究資料の原稿は、原則として1編につき図表、抄録を含めて刷り上がり8ページ以内とし、それを超える分は、その実費を著者負担とするほか、特別の経費を要する場合は、この分についても本人負担とする。
8. 校正は、編集委員会作業分を除き原則として行わない。
9. 別刷り希望者は、著者校正の際表紙に希望部数を朱書する。必要経費は著者負担とする。
10. 送付先は下記とする。

〒380-8544 長野市西長野 6-口
信州大学教育学部
日本体育学会 長野支部会 事務局

編 集 後 記

長野体育学研究第15号をお届けいたします。

平成19年度4月より新体制になり、糟谷英勝長野支部会長、岩田 靖理事長のもと活動してまいりました。編集作業はなにぶん不慣れなもので、投稿者の先生方、査読にご協力いただいた先生方には、ご迷惑をおかけいたしました。

例年12月に開催されていた長野支部学会および総会が今年度は1月に開催され、第43回大会は12題もの演題が集まる大盛況のうちに終わることができました。体育・スポーツの研究領域は、それを対象として、自然科学あり、社会科学あり、医学あり、あらゆる切り口でのアプローチが可能な総合的学際領域といえます。個人的には、普段、学生を介した教育の場面でしか接することのない同僚の先生方が、互いに“専門外”の研究発表に耳を傾け、時には質疑応答をする光景は、極めて新鮮に感じられました。ここ10年来、日本体育学会では「体育・スポーツ科学の分化と統合」について議論されてきています。マンモス化した日本体育学会では実現できない、支部大会ならではの「統合」のひとつの姿を第43回大会に垣間見ることができた気がします。

(結城匡啓)

編 集 委 員

渡 邊 伸 (委員長)

結 城 匡 啓 橋 本 政 春 大 野 高 志

Editorial Committee

N. Watanabe (Chief Editor)

M. Yuki

M. Hashimoto

T. Ohno

平成20年3月19日 印刷

平成20年3月31日 発行

非 売 品

長野体育学研究第15号

(Nagano Journal of Physical Education and Sports)

編集発行者

糟 谷 英 勝

発 行 所

日本体育学会長野支部会

〒380-8544 長野市西長野6-ロ

信州大学教育学部スポーツ科学教育講座内

日本体育学会長野支部会

印 刷 者

信教印刷株式会社

NAGANO JOURNAL OF PHYSICAL EDUCATION AND SPORTS NO. 15

CONTENTS

Original investigations

- 1 Kenichi SATO, Masahiro YUKI and Toshihiko SANJO
A Three-dimensional analysis of the trunk motion at mid-phase
of men's 100m races in the Nagano Athletics Championships
2006

Practical investigations

- 9 Takashi TAKEUCHI, Yasushi IWATA and Takashi OHNO
Considerations on construction of teaching material of "Field-
ing/Run scoring" game in elementary physical education: Quest
for corporative play based on intentional and selective decision-
making

Practical reports

- 25 Miyoshi KITAHARA
The circumstance of physical education in Bangladesh

News and Informations

Edited by

Nagano Branch of Japanese Society of Physical Education

March, 2008